

2015年1月18日 礼拝メッセージ

聖書：ルカの福音書 20 章 41～47 節

説教：ダビデの子キリスト

1 律法学者

1) 「先生。りっぱなお答えです。」

今日の箇所、イエスは何か質問をしていることはわかるのですが、いったい何を言いたいのか何度読んでも頭が混乱するばかりです。

まずイエスがどうしてこんな話を持ち出してくるのか、その背景を見ておきたいと思えます。前回、復活を信じないサドカイ人たちがイエスのもとにやってきた所を見ました。彼らは、もし本当に復活があるというのならこんなばかげた事が起きてしまう。だから復活などあるはずはない、と言いかかりをつけます。それに対してイエスはモーセのことばを取り上げ、復活は間違いなくあるのだと解き明かしました。

そのやりとりをそばで聞いていたのは律法学者と呼ばれる人たちです。名前の通りに聖書の専門家、サドカイ人たちとは違って復活は信じています。ふだんはイエスに対しては強い憎しみの思いを抱いているのですが、イエスが復活はあると力強く言ったもの、ですから、この時ばかりは、「先生。りっぱなお答えです」と言って、まるでイエスの味方であるかのような態度に出ました。

2) 見えを飾る人たち

ところが、イエスは 46、47 節で弟子たちに、「律法学者たちには気をつけなさい」と忠告します。彼らは長い衣をまとい、上座に座るのが好きで、見えを飾るのが大好きだと言うのです。律法学者たちに限らず、私たち

の身の回りにもときどきこんな人たちがいます。いや、これは他人事ではなくて、ひょっとして自分のなかにも同じような傾向があることを認めざるを得ません。私は立場上、みなさんから「先生」と呼ばれます。最初の頃は心の中で「先生と呼ばれるような資格はない」と言っていたのに、何年かするうちに何も感じなくなる。先生と呼ばれるのが当たり前になる。そんな私ですから、「こういう人たちは人一倍厳しい罰を受けるのです」と言われると、ドキッとします。

イエスは、なぜいつも律法学者のことを厳しく扱うのでしょうか。42 節から 43 節にかけてイエスが質問していることがヒントとなります。

2 イエスの解き明かし

1) キリストはダビデの子

まずイエスは、41 節でこう言います。「どうして人々は、キリストをダビデの子と言うのですか。」

イスラエルの人々はキリストはダビデの子として来られると信じていたことは確かです。ちゃんとした根拠がありました。第二サムエル記 7 章 12、13 節で、神がダビデにこう語っていたからです。「あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちと眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」

「あなた」とはダビデのことです。ダビデの後から世継ぎの子が出て、その子どもがイスラエルの王座に着く。それが救い主キリストである。ですからキリストはダビデの子ということになります。

そこまではよいとして、問題なのはこの先です。イエスは次にダビデが書いた詩篇 110 篇 1 節のみことばを取り上げます。42, 43 節。「主は私の主に言われた。『わたしが、あなたの敵をあなたの足台とする時まで、わたしの右の座に着いていなさい。』」

読んでお気づきのとおり、普通の文章ではありません。「主はわたしの主に言われた。」「主」が二回出て来る。主がひとりの人なら、自分で自分に言ったことになりこれでは堂々巡りですから、訳がわかりません。そうではなくて、同じ「主」ということばが使われているけれど、実はこれは別々の主を指しています。最初に出て来る「主」は父なる神、次に出て来る「主」はキリスト、救い主を指しています。ですからこの詩篇はこう言っていることになる。「父なる神は子なるキリストに言われた。『父が、子であるキリストの敵をあなたの足台にする時まで、つまりこれは敵をさばく時までということですが、父の右の座に着いていなさい。』」

2) ダビデがキリストを主と呼ぶ

人々は第二サムエル記 7 章 12 節のみことばをとおして、キリストはダビデの子として来られると信じています。いっぽう詩篇のみことばによれば、ダビデはキリストを「わたしの主」と呼んでいます。

そうしますとどうなるか。一方では、キリストはダビデの子であると言い、もう一方ではダビデはキリストのことを「わたしの主」

と呼ぶ。おやっと思います。ダビデから見ると、キリストはダビデの子孫としてくるのですから、まだ産まれてもいません。ところがダビデは、まるですぐそばにキリストが生きているかのように、「私の主」と呼ぶ。産まれてもいない、まだ存在していない、どこにもいないはずなのに、どうしてダビデはまるで今そこにいるかのような言い方をするのか。普通に考えたら、時間の順序が合いません。辻褄が合わない。だからおやっと思ってしまう。

イエスはこの箇所を取り上げ、いったいあなたがたはこの詩篇をどう解釈するのですか。聖書の専門家である律法学者に対して、そう問いかけているのです。けれども、律法学者たちは答えられません。

3) もしも、ダビデの時キリストがいなかったなら

イエスはどうしてこのような質問を突然のように切り出してきたのでしょうか。イエスがいったい何を言おうとしているのか。ずばり結論から言えば、よみがえりのことです。でもどこにもよみがえりのことばがありません。どう考えたらそんな話になるのか。道筋を整理するために、ふたつの「もしも」ということを考えてみます。「もしもこうであったなら、どういうことになるのか」という「もしも」です。

ひとつめの「もしも」はこうです。ダビデのときはまだキリストはいなかった。律法学者たちはこんなふう考えていた訳ですが、もしそうであるならどんな結果になるか。

キリストはもともといないのですから、あるとき突然、ダビデの子と呼ばれる男が現れて、自分はキリストであるかのように振る

舞っているけれど、こんな男がキリストである訳がない。嘘をついているのだ、ということになります。律法には、自分を神と言う者は殺すようにと書いてある。律法学者たちは、その名の通り律法を守らなければと考える訳ですから、イエスを殺すことは神の命令であると信じて疑わない。そうやってイエスを十字架に追いやり殺しました。自分たちは何も悪いことをしていない。いや、むしろ自分たちはきちんと律法を守ったのだと考え、満足しました。嘘つきのほら吹き男を正しくさばいた。それで終わりです。

ダビデの時からいままですっとキリストはいなかった。ですから、自分のことをキリストと自称する者が死んだとしても、それは普通の人間が死んだのですから、よみがえりなど起きるはずはない。そういう結論になります。それがひとつ目の「もしも」です。

4) もしも、キリストがダビデの主であるなら

ではふたつ目の「もしも」を考えてみましょう。イエスが解き明かされたように、もしも主キリストがダビデの時にすでにおられ、その方がダビデの子としてやがて来られたのだとしましょう。そうしたらよみがえりはどうなるのか。

ダビデが「私の主」と呼んで霊の目で仰ぎ見た方、ダビデの子としてやがてイスラエルに来られると人々に信じられていた方を、律法学者たちが殺したことになります。

そうしますとどうなりますか。ダビデの時から数えてもおよそ千年の間変わらずに存在された方が、十字架で殺されておしまい。この世界を創造された方が、人の手にかかって殺されて滅び跡形もなく消えてしまう。人

間なら、例えば自分のつくった機械に巻き込まれて死ぬことがあります。神もそれと同じということになる。この世界を完全なものとして造られた方が、まるで事故に遭うように十字架で殺されて死ぬ。千年の間も生きておられた方が、簡単に死ぬのですか。おかしいですね。むしろ、この方は死ぬことなどありえないと考える方が自然ではないですか。たとえ十字架で殺されたとしても、神は死に打ち勝つことができる。「あなたの敵をあなたの足台とする時までには」とは、そういう意味です。ダビデが、キリストに向かって「私の主」と呼びかけていた事実をとりあげ、イエスはご自分のよみがえりがすでに預言されていることを示されました。

3 「私の主」と告白する意味

「でも」と、多くの方は反論するでしょう。「それは神の子だからでしょう。この方が神なのだから、死んだとしてもよみがえることができる。私たちは神ではない。やっぱり死んだらそこでおしまいなのだ。」

もし本当にそうなら、キリストは私たちとなんの関係もないことになります。神は偉かった。ただそれだけの話です。そうではありません。

律法学者たちのように見えるものだけがこの世のすべてであると考えたら、キリストは見えません。ダビデは見えるものだけがすべてではないと信じていました。だから見えない方に向かって「私の主」と呼ぶことができました。見えない方であっても、死からよみがえられた方がおられる。肉の目には見えなくても、永遠のいのちが続く道が私たちの前に備えられている。それは決して幻想ではありません。神がいのちをかけて私たちに

与えてくださったものです。神の方から私たちに
に向けて関係を結んでくださったのです。神に
起きたことは私たちにも起きるのだと約束して
くださいました。

私たちは、イエス・キリストを「私の主です」と告白
します。それは何を告白していたことになるでし
ょう。主は死からよみがえって今も生きている
ことを告白しています。それと同時に、私たちも
この方をの後をたどってよみがえることができ
ると告白している。それが「私の主」に込めら
れた意味です。

「私の主」と告白できる幸いを感謝します。